

B 111 小さなクロー値をもつ着衣の感覚及び皮膚温に及ぼす熱的效果  
大阪市大生活科学 ○三平和雄 花田嘉代子

目的 保温力の小さい衣服でも着衣すれば温熱感覚や皮膚温に影響をおよぼすはずである。ひとはどの程度の保温力をもつものならその有無を弁別しうるか、またどの程度の保温力の相違を弁別しうるか、これらの問題を心理的・生理的に探求する。

方法 実験Ⅰ：供試々料の保温力が0.006～0.011 クローのストッキング10種を例にして、被験者10名に対し、着用直後の温熱感覚を静止および動作時について測定した。方法は10種から選んだ2種のストッキングを片方づゝ下肢部につけて、着用直後の温熱感覚を一对比較する。

実験Ⅱ：実験Ⅰの中から7種のストッキングを選び、被験者2名について着用前および着用50分後の温熱感覚および皮膚温変化を測定した。実験Ⅰ、Ⅱの時期は夏・冬である。

結果 実験Ⅰ：一对比較による温熱感覚の尺度値は、さらにクラスタ分析され、4～5群に分けられた。ストッキングの場合はクロー値が0.05までは感覚値も増大し、クラスタ分けした群内・群間の尺度値を比較すると、0.01クローの差を弁別するが、それより大になると弁別し難くなる。

実験Ⅱ：温熱感覚 $S$ および皮膚温 $T_s$ についてストッキング着用50分前後の変化分 $\Delta S$ 、 $\Delta T_s$ を計測すると、夏はクロー値の大なる程両者が相対的に増加する傾向が得られるが、冬は気温と皮膚温の差が大となるので、着用後も感覚および皮膚温が下降する場合が見られる。これに抗するストッキングの保温力は気温と皮膚温の差が15 deg Cに対し0.1クロー以上必要とするようである。この事実は個人差はあるが、下腿部でより明瞭に示された。